コロナ緊急対策の名のもとに統制された戦時経済へ

　どうせ、安倍ちゃんがようやく決めてくれた１人 10 万円一発ぽっきりじゃ足りませんでした、コロナウイルスによる自粛経済からの回復のスピードが失業拡大に追いつきませんでした、とか言って「現金給付おかわり」や「休業補償の拡大」を求める声はどんどん大きくなると思うんですよ。一家で１人 10 万円もらったって、それで「ああよかった。これでどうにかなる」と救われる人がいると思いますか。おらんでしょ。しかも、それをやるのに 12 兆円もかかるんですよ。

　そして、国庫的にはこれらは全部捨て金になる一方、食えない国民からしたら、政府が悪い、どうにかしてよという話になるんですよね。「生活できない」ってのは切実ですし、それが正義ですから
世の中はコロナ緊急対策の名のもとに非常時対応となり、やがて**資本主義から統制された戦時経済へと移行していく**ことになるのです。

出典　文春オンライン記事

大波をかぶってなお生き残っているのは……

　失われた10年、ネットバブルの崩壊、、東日本大震災、いろいろと転換点となる事件は経験してきたけれども、そういう大波をかぶってなお**生き残っている企業**も人物も、特徴としては「**欲をかきすぎず、ほどほどに頑張り、無難に手元資金を残している人たち**」のように思えるんですよ。

収入となるフローがたとえ半分、いや、仮にゼロになっても、それまで相応な生活で**分をわきまえて貯めてきたストックで１年、２年と持ちこたえられる立場の人たち**。大多数の日本人が共働きで、子育ても頑張り、介護でも苦労して、歯を食いしばって生きている中で、旅行やコンサートなどのコト消費で派手に浪費せずにそこそこ貯蓄したことで、冬が厳しくても越せる蓄えがあるのです。
厳しいようだけど、**収入が途絶えて、国家や自治体がどうにか対策を打ってくれるのを待たなければいけない人たち**ほど、社会に頼りながら社会に対して「**対応が遅い」と批判**することになるのです。
　ある意味で、イソップ童話『アリとキリギリス』的な側面は仕方がないと思うんですよ。

　生き残れる人とは結局、稼げる方法を編み出せる人生の在庫が豊富にあり、きちんと現金を蓄えてきた人なんだと思います。そうでない人は組織から切られないよう必死に頑張り、あるいは受け入れてくれる先が見つかるまで漂流するしかない。ここまで来ると、いまある手持のおカネがいくらなのかよりも、不安に押しつぶされないように心を健全に保つほうが重要だったりするのでしょう。
　大事なものを守りながら、やはり生き残らないと駄目です。**感染症から身を守るだけでなく、経済困難な状況でも自分自身が生き抜くことが何よりも大事**です。そして、生き残るために**何が必要か、何をしなければならないか、手持ちの在庫を見ながら必死に考える**ことができる人が、逆説的に困難な時代を生き抜くのだろうと。

出典　文春オンライン記事

危機に直面したいまこのとき、すべきことは

　中高年どころか、30代でもパソコンが満足に使えない、自宅にWi-Fi環境も用意していなかったという社員が出ると、業績不振が見込まれる会社は危機対応ができなかったり能力のない社員さんを真っ先に切りに行くわけですよ。
どんなに**職場では「いい人」でも、リモートワークもありの環境になったら成果があからさまに出て、職場の潤滑油的な人ほど立場がなくなっていきます。**必然的に、企業など組織内での働き方は変容せざるを得ないし、容赦なく働く個人に変革を迫ることになります。

　現場に出る仕事でない限り、突き付けられているのは「非常時は誰も助けてくれない」前提で、自分が如何に環境に適応できるよう日々の生活の中で準備をしてきたのか、です。それは生きていくために必要な現金をどのくらい持っていたのかだけでなく、**自分のパフォーマンスをこの状況下でも出せる仕事の仕方を整えてきたのか**だと思うんです。

出典　文春オンライン記事